

# Panzer IV/70(A)

## ドイツIV号駆逐戦車/70(A)



解説：斎木伸生

取材協力：ソミュール戦車博物館  
Photos are courtesy of Le MUSÉE  
des BLINDÉS de SAUMUR, France.

### ■IV号戦車への70口径7.5cm砲搭載計画

IV号戦車はドイツ軍で唯一、第二次大戦の全期間を通して主力を担った戦車です。本来はIII号戦車を補佐する支援戦車として構想され、III号戦車より大口径の7.5cm榴弾砲を搭載。そのため、III号戦車に比べてわずかに大柄でした。この微妙な差が発展の余裕につながり、大戦中に幾度も火力や防御力の強化を行うことができたのです。特に火力に関しては、G型から長砲身の43口径砲が搭載され、生産中に48口径砲へ強化。当時の連合軍戦車との戦闘において十分な能力を獲得しました。さらにその後、パンサー戦車と同じ70口径7.5cm砲を搭載する研究が行われましたが、これはさすがに、IV号戦車の砲塔には重量・サイズともに過大という結論が下りました。

こうして、IV号戦車の火力強化は48口径砲の搭載で一応の完結を迎えましたが、ソ連軍がT-34-85中戦車やJS-2重戦車のような新型戦車を投入するようになると、IV号戦車は劣勢に追い込まれます。頼りのパンサー戦車はまだ生産数が少なく、IV号戦車が主力を務めざるを得ない状況でした。事態を重く見た陸軍兵器局は、1944年6月26日、戦闘車輛の主力メーカーであるアルケット社に対し、早急にIV号戦車に70口径7.5cm砲を搭載せよと命じます。

しかし、前述のようにIV号戦車の砲塔に70口径砲を搭載するのは不可能でした。そこで考えられたのが、砲塔を含むIV号戦車の上部を丸ごと変更するという方法です。当時ドイツ軍は、IV号戦車の車体に改造を施して固定戦闘室を設け、70口径7.5cm砲を搭載した「IV号駆逐戦車/70(V)ラング」を完成させていました。これは、III号突撃砲の有用性に刺激を受けた兵器局がIV号戦車ベースの突撃砲として開発した車輛です。このラングの戦闘室を、ほぼオリジナルのままのIV号戦車車体に載せることにしたのです。

こうして誕生した新車輛には、末尾にアルケット社の頭文字の“A”を付けて、IV号戦車ラング(A)の名称が与えられました。名称はこの後変転しますが、ここではIV号駆逐戦車/70(A)に統一することにします。なお、しばしば伝えられるツヴィシエンレーズンク(Zwischenlösung：ドイツ語で“暫定型”の意)という呼び名は、制式名称として使われたことはないようです。

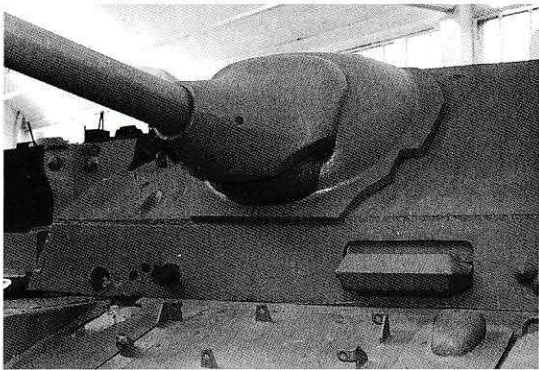
同じ主砲を持ち、外見もよく似たIV号駆逐戦車L/70(A)と

ラングですが、前者は『IV号戦車の火力強化型』、後者は『III号突撃砲の発展型』という全く異なるコンセプトのもとに誕生したというのが興味深いポイントでしょう。

### ■IV号駆逐戦車/70(A)の開発と特徴

“暫定型”という通称のとおり、IV号駆逐戦車/70(A)はあくまでも、「III/IV号統制車台突撃砲」と呼ばれる新車輛が完成するまでの橋渡し役でした。「III/IV号統制車台突撃砲」とは、III/IV号戦車のコンポーネントを流用して製作した車台に、70口径7.5cm砲を搭載したもので、通常のIV号戦車、ラング、IV号駆逐戦車/70(A)すべての後継車輛となる予定でした。しかし、戦争末期の混乱によりこの計画は頓挫。結局、IV号戦車、ラング、IV号駆逐戦車/70(A)の生産を継続することになったのです。

IV号駆逐戦車/70(A)の生産は1944年8月からIV号戦車の最終生産タイプであるJ型の一部を引き抜いて行われ、1945年3月までに270輛余りが完成しました。本車は基本的にIV号戦車の車体上部をラングの戦闘室に置き換えたものですが、燃料タンクと砲尾のクリアランス確保などの理由から、戦闘室下部に装甲板を立ち上げてかさ上げしています。このため、ラングに比べ車高が高くなっているのが特徴です。また、IV号戦車の車体にてできるだけ手を加えずに生産されたため、ラングのように車体前部をくさび形に延長して防御力を高める、といった工夫は見られません。



戦闘室は車高の増加にともない側面板が延長され、傾斜角が垂直に近くなりました。装甲厚はラングと変わらず前面80mm、側面40mm、後面30mm。細かい部分では、前面右側のピストルポートカバーが円すい状のものから平板に変わり、戦闘室の四隅に吊り上げ用のフックを追加。上面には“フォアザツプ”と呼ばれる、90度湾曲した銃身が付いたMP44機関銃を装着できるマウントを備えていましたが、実際にはほぼ装備されず、円形のプレートで塞がれました。

主砲はパンサー戦車のものを改設計した超長砲身の70口径7.5cm砲、Pak42です。性能は通常の徹甲弾で100mの距離から60度傾斜した138mm厚の装甲板を貫徹でき、500mで129mm、1,000mで111mm、2,000mで88mm。これは当時のほぼすべての連合軍戦車に対して優位に立つことができる威力でした。なお、砲身を支える起倒式のトラベリングロックは、車高増加によりラングと共用できなくなったため、パイプを組み合わせた独自のものになっています。

走行装置はIV号戦車と同じですが、車体重量の増大、特にノーズヘビーに対応するため、第1～第4転輪(車輪によっては第3転輪まで)がゴム縁のない鋼製転輪に変更されました。極初期は鉄板製だったとされる車体側面のシュルツェンも、資材節約と軽量化のため金網製に。シュルツェンは元々バイザーなどを狙い撃つ対戦車ライフル対策でしたが、金網製になってからは成型炸薬弾対策として取り付けられました。他にも生産中に行われた変更は多く、上部支持輪を4個から3個に減らす、牽引フックを側面装甲板と一体化したシンプルな構造とする、といったIV号戦車J型と同様の改修が行われています。ただし、これらは正確に実施されたわけではないようで、生産末期の車輛にもかかわらず、上部支持輪を4個装備しているケースも確認できます。また、本車の生産時期と吸着地雷対策のツィメリットコーティングの適用時期は微妙に重なるものの、コーティングが施された車輛は現在まで確認されていません。

#### ■IV号駆逐戦車/70(A)の配備と戦歴

ラングが対戦車戦闘に特化した戦車駆逐大隊に配備されたのに対し、IV号駆逐戦車/70(A)は当初、通常の戦車として扱われ、IV号戦車と同様に戦車師団/旅団の戦車大隊へ配備されました。1944年10月8日、ヒトラーの護衛部隊から発展した総統護衛旅団への配備(輸送)開始を皮切りに、同年中に第1、3、13、17、第25戦車師団、グロースドイチュラント機甲擲弾兵師団、第2戦車連隊、第208戦車大隊がそれぞれ数輛～十数輛ずつを受領しています。

1945年に入ってからは、1月半ばまでに第7、24戦車師団へ。その後、遠距離戦用の火力として突撃砲部隊に本車を1個小隊ずつ配備すると決定されたため、1月末に配備された第29戦車連隊第1大隊を除き、以後の配備先は突撃砲旅団となりました。1月半ばから3月半ばまでに本車を装備したのは、第190、210、236、243、244、276、280、300、301、311、341、394、667、902、905、911突撃砲旅団、グロースドイチュラント突撃砲旅団、第111突撃砲兵教導旅団。ほとんどは数輛ずつでしたが、グロースドイチュラント突撃砲旅団は31輛というまとまった数を受け取りました。

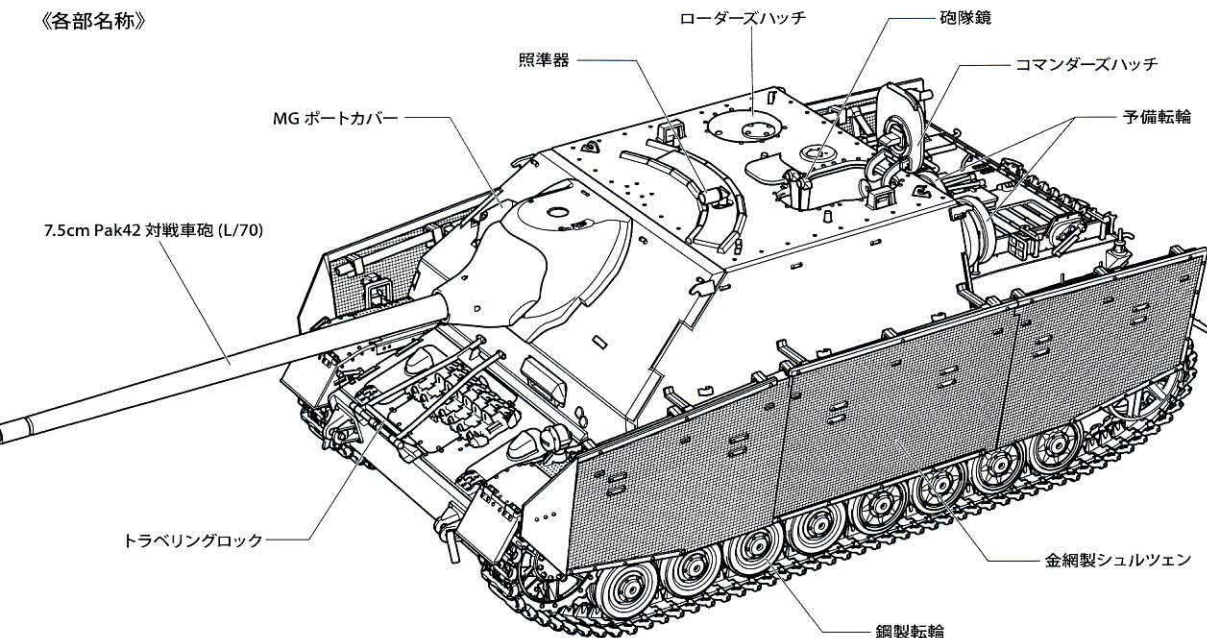
IV号駆逐戦車/70(A)は東西両戦線に送られたものの、大戦末期の混乱もあってか戦歴はほとんど知られていません。詳細な記録が残る数少ないエピソードの1つが、1945年4月にポーランドのブレスラウでソ連軍を迎え撃った、第311突撃砲旅団のハルトマン少尉の奮戦です。少尉は本車に乗り込み、長射程と高い貫徹力を活かしてJSU-152を含む13輛ものソ連軍車輛を次々に撃破。仲間との連携によって激しい攻勢に耐え、ブレスラウの堅守に成功したのです。この武勲により、ハルトマン少尉は騎士鉄十字章を授けられました。また、第2戦車連隊から第106戦車旅団へ受け渡された車輛は1944年末に西部戦線で戦い、数発の75mm砲弾を受けて擱座。自由フランス軍に捕獲されたこの車輛は、唯一現存するIV号駆逐戦車/70(A)となり、フランスのソミュール戦車博物館に展示されています。

IV号戦車の火力強化の到達点として大戦末期に登場し、応急的な車輛ながら多くの部隊に配備されたIV号駆逐戦車/70(A)。超長砲身が繰り出す一撃はまさしく前線の将兵たちが待ち望んでいたものであり、圧倒的な攻勢に飲まれながらも、強力な連合軍戦車を撃ち取るタンクキラーとしての使命を、終戦の日まで果たし続けたのです。

#### ■IV号駆逐戦車/70(A)諸元

- 全長：8.44m ●全幅：2.88m(シュルツェン等含まず)
- 全高：2.35m
- 重量：27トン ●乗員：4名
- エンジン：マイバッハHL120TRM 4ストロークV型12気筒液冷ガソリンエンジン
- 最大出力：272馬力/2,800回転 ●最大速度：37km/h
- 航続距離：200km(路上)
- 武装：7.5cm Pak42対戦車砲(L/70)×1、7.92mm MG42機関銃×1

#### 《各部名称》



## ■ Seeking Greater Firepower

Known as the only main German armor to have fought right through WWII, the Pz.Kpfw.IV (Panzer IV) was originally designed for a complementary supporting role to the Pz.Kpfw.III; it turned out to be highly adaptable and was thus the subject of numerous upgrades. Firepower was boosted first to an L/43 gun and then to an L/48 piece, and a version with an L/70 7.5cm gun was also mooted but originally withdrawn over weight concerns.

However, Soviet T-34-85 and JS-2 tanks proved more than a match for the Panzer IV, and with the promising Panther tank still not available in large numbers, on June 26, 1944 the Waffenamt ordered major manufacturer Alkett to design a vehicle with the L/70 7.5cm gun on the Panzer IV. This proved impossible, but a new idea emerged: to replace the upper hull with the fighting compartment and L/70 7.5cm gun from the Jagdpanzer IV/70(V) Lang, itself based upon a modified Panzer IV chassis. The resulting combination of Lang superstructure on a standard Panzer IV chassis was christened the Panzer IV/70(A), the "A" for Alkett. While the IV/70(V) Lang and IV/70(A) were very similar, it is interesting to note that they were developed from different principles, the (A) being essentially an upgunned Panzer IV, and the (V) Lang an evolution of the Sturmgeschütz III assault gun.

## ■ The Panzer IV/70(A) Design

The IV/70(A) was informally referred to as a "Zwischenlösung" (stopgap); however, hope for a successor was lost in the confusion of declining German war fortunes. Production of the IV/70(A) began in August 1944 using chassis from the Panzer IV Ausf.J, and continued until March 1945 – more than 270 were manufactured in total. Its superstructure was basically that of the IV/70(V) Lang, albeit with a higher profile on account of its more upright lower side plates. Like the IV/70(V) Lang, armor was 80mm on the front, 40mm on the sides and 30mm on the rear, although it had a new flat pistol port cover and hooks on all four corners of the fighting compartment. The curved "Vorsatz P" mount allowed firing of an MP44 machine gun from a ninety-degree barrel, from inside the vehicle.

Redesigned slightly from the Panther, the Pak42 was an L/70 7.5cm piece that penetrated 138mm of sixty-degree armor from 100 meters, and 129mm, 111mm or 88mm from 500, 1,000 and 2,000 meters respectively, a significant threat to any Allied armor of the time. Its travel lock was an improvised pipe

structure.

While the Panzer IV chassis suspension was carried over, the front four road wheels (three on some vehicles) on either side had their outer rubber rims removed due to the IV/70(A)'s nose-heaviness; Schürzen side plates are said to have originally been solid plate, but later changed to mesh, a material-conserving design also effective against shaped charges. Numerous other changes were irregularly applied during production, including a reduction from four to three return rollers and integration of the towing hook into the side armor.

## ■ Deployment and Performance

The IV/70(A) was originally deployed as a standard tank, and hence was supplied like the Panzer IV to Panzer Divisions and Brigades, starting with Hitler's Führerbegleitbrigade (escort brigade) on October 8, 1944 and later that year to various Panzer Divisions including the 17th, Grossdeutschland Panzergrenadier Division, 2nd Panzer Regiment and 208th Panzer Battalion, extending in January 1945 to the 7th and 24th Panzer Divisions. Thereafter, it was provided to Sturmgeschütz (assault gun) Brigades, usually in small numbers.

Although deployed on both Western and Eastern fronts, little record remains of the IV/70(A) in battle. One exception, however, is the exploits of a Lieutenant Hartmann of the 311th Sturmgeschütz Brigade, whose IV/70(A) took out thirteen Soviet tanks including JSU-152s from range when defending Breslau in April 1945, earning him the Ritterkreuz. A 106th Panzer Brigade IV/70(A) was captured in 1944 and currently resides in Saumur Armoured Museum.

Often referred to as a stopgap, and only appearing at the end of the war, the Panzer IV/70(A) would nonetheless have been a welcome addition for its own troops and a constant threat to Allied forces.

### Panzer IV/70(A) Specifications

- Length: 8.44m
- Width: 2.88m (without Schürzen)
- Height: 2.35m
- Fully-Loaded Weight: 27 tons
- Crew: 4
- Engine: Maybach HL120TRM liquid-cooled 4-stroke V12 gasoline engine
- Maximum Output: 272hp (at 2,800rpm)
- Maximum Speed: 37km/h
- Range: 200km (roads)
- Armament: 7.5cm Pak42 L/70 anti-tank gun x1; 7.92mm MG42 machine gun x1

## ■ Auf der Suchen nach größerer Feuerkraft

Bekannt als die einzige Panzerwaffe, die den ganzen II. Weltkrieg gekämpft hat, war der Pz.Kpfw IV (Panzer IV) ursprünglich gedacht zur Unterstützung des Panzer III. Er stellte sich jedoch als gute Basis für weiter Kampfwertsteigerungen dar. Die Feuerkraft wurde erheblich gesteigert; zuerst auf eine L/43 Kanone, dann auf eine L/48 Kanone und eine Version mit einer L/70 7,5 cm war vorgesehen, aber aus Gewichtsgründen aufgegeben.

Aber wie auch immer waren die sowjetischen Panzer T-34-85 und JS-2 mehr als ebenbürtig zum Panzer IV und da der vielversprechende Panther nicht in großen Stückzahlen verfügbar war beauftragte das Waffenamt die Firma Alkett am 26.Juni ein Fahrzeug zu entwickeln, mit einer L/70 7,5cm auf Basis eines Panzer IV Fahrgestelles. Das schien zunächst unmöglich, aber eine neue Idee tauchte auf: die Oberwanne sollte ersetzt werden mit einem Kampfraum mit der L/70 7,5cm Kanone vom Jagdpanzer IV/70(V) Lang auf einem veränderten Panzer IV Fahrgestell. Diese Kombination wurde Panzer IV/70(A) mit "A" für Alkett benannt. Während der IV/70(V) Lang und der IV/70(A) sehr ähnlich waren ist es interessant zu bemerken, dass der "A" ein aufgerüsteter Panzer IV war und der IV Lang eine Weiterentwicklung des Sturmgeschützes III.

## ■ Das Design des Panzer IV L/70(A)

Der IV/L70(A) war in der Information eine Zwischenlösung, aber eine Nachfolge war in den Kriegswirren nicht zu sehen. Die Produktion des IV/70(A) begann erst im August 1944 und nutzte das Chassis des Panzer IV Ausf.J und lief bis März 1945; mehr als 270 Fahrzeuge wurden insgesamt gebaut. Sein Aufbau war grundsätzlich der des IV/70(V) Lang jedoch mit größerem Profil, wegen der der Halterungen der Seitenschürzen. Wie beim IV/70(V) war die Panzerung vorne 80mm, 40mm an den Seiten und 30mm hinten. Jedoch hatte er eine neue flache Pistolenuke und Abschlepphaken an allen 4 Enden der Wanne. Der gebogene "Vorsatz P" erlaubte die Nutzung einer MP44 Maschinenpistole auf einer Lafette mit einem Richtwinkel von bis zu 90 Grad, zu bedienen aus dem Fahrzeuginnenen.

Überarbeitet vom Panther konnte die Pak42 eine L/70 7,5cm Kanone 138mm eine 60 Grad angewinkelten Panzerplatte auf 100m durchschlagen und 129mm, 111mm und 88mm auf 500m, 1000m und 2000m, eine wahre Bedrohung für alle alliierten Fahrzeuge zu dieser Zeit. Seine Rohrzurung war eine verbesserte Rohrkonstruktion.

Während die Radaufhängung des Panzer IV Chassis beibehalten wurde, waren die ersten 4 Laufrollen (manchmal 3) ohne Gummibandagen, um die Kopflastigkeit des IV/70(A) zu kompensieren. Es gibt Quellen, die aussagen, dass die Seitenschürzen zunächst aus Vollstahl waren, aber später zu Drahtgittern verändert wurden, ein Material, das sich auch gegen Hohlladungen bewährte. Viele andere Änderungen wurden eingebracht, wie die Reduktion von 4 auf 3 Stützrollen und die Integration von Zughaken an den Seiten.

## ■ Verteilung und Einsatzleistungen

Der IV/70(A) war ursprünglich als Standard Panzer eingesetzt und wurde daher wie der Panzer IV bei den Panzerdivisionen und Brigaden genutzt, beginnend bei Hitlers Führerbegleitbrigade am 8.Oktober 1944 und im Folgenden des Jahres bei verschiedenen Panzerdivisionen einbezogen die 17te Panzergrenadierdivision Grossdeutschland, das 2te Panzerregiment und das 208te Panzerbataillon und ab Januar 1945 zu den 7ten und der 24ten Panzerdivision. Danach wurde er zu den Sturmgeschütz Brigaden in kleiner Zahl verbracht.

Obwohl der Einsatz an Ost- und Westfront erfolgte sind nur wenige Berichte des IV/70(A) bekannt. Eine Ausnahme ist der Bericht von Leutnant Hartmann aus der 311ten Sturmgeschützbrigade dessen IV/70(A) dreizehn Feindpanzer vernichtete eingeschlossen JSU-152 beim Kampf um Breslau im April 1945, was ihm das Ritterkreuz einbrachte. Ein IV/70(A) der 106ten Panzerbrigade wurde 1944 erbeutet und steht heute im Panzermuseum in Samur.

Oft als Lückenfüller bezeichnet und erst zum Ende des Krieges auftretend war der Panzer IV/70(A) eine wertvolle Bereicherung eigener Truppen und eine stetige Bedrohung für die Alliierten.

### Panzer IV/70(A) Technische Daten

- Länge: 8.44m
- Breite: 2.88m (ohne Schürzen)
- Höhe: 2.35m
- Gefechtsgewicht: 27 Tonnen
- Besatzung: 4
- Motor: Maybach HL120TRM flüssigkeitsgekühlter 4-Takt V12 Benzinmotor
- Höchstleistung: 272hp (bei 2800 U/min)
- Höchstgeschwindigkeit: 37km/h
- Fahrbereich: 200km (auf Strasse)
- Bewaffnung: 7.5cm Pak42 L/70 Panzerabwehrkanone x1; 7.92mm MG42 Maschinengewehr x1

### ■ La Quête de la Puissance de Feu

Connu comme le seul blindé lourd allemand ayant combattu durant toute la 2<sup>ème</sup> G.M., le Pz.Kpfw.IV (Panzer IV) fut conçu à l'origine comme soutien au Pz.Kpfw.III; il s'avéra être particulièrement évolutif et connut donc de nombreuses améliorations. La puissance de feu fut d'abord accrue par un canon L/43 puis une pièce L/48, et une version avec un canon L/70 de 75mm fut également envisagée mais abandonnée pour des raisons de poids.

Cependant, les tanks T-34-85 et JS-2 soviétiques se montraient des adversaires plus qu'à la hauteur du Panzer IV, et alors que le promoteur Panther n'était pas encore disponible en grand nombre, le 26 juin 1944, le Waffenamts ordonna au constructeur Alkett de concevoir un véhicule armé d'un canon L/70 de 75mm basé sur le Panzer IV. Cela s'avéra impossible mais une nouvelle idée émergea : remplacer la caisse supérieure par la casemate et le canon L/70 de 75mm du Jagdpanzer IV/70(V) Lang, lui-même basé sur un châssis modifié de Panzer IV. La combinaison de la superstructure Lang et du châssis standard de Panzer IV qui en résulta fut désignée Panzer IV/70(A), "A" pour Alkett. Si le IV/70(V) Lang et le IV/70(A) étaient très ressemblants, il est intéressant de noter qu'ils résultaient de concepts différents, le (A) étant un Panzer IV avec un canon plus puissant, et le (V) Lang une évolution du canon d'assaut Sturmgeschütz III.

### ■ Conception du Panzer IV/70(A)

Le IV/70(A) était officiellement considéré comme une "Zwischenlösung" (solution provisoire). Cependant, tout espoir d'un successeur fut perdu avec le déclin militaire allemand. La production du IV/70(A) débuta en août 1944 en utilisant le châssis du Panzer IV Ausf.J, et se poursuivit jusque mars 1945 - plus de 270 étant fabriqués au total. Sa superstructure était basiquement celle du IV/70(V) Lang, mais plus haute du fait de panneaux latéraux inférieurs moins inclinés. Comme le IV/70(V) Lang, le blindage était de 80mm à l'avant, 40mm sur les côtés et 30mm à l'arrière, avec une nouvelle trappe plate de sabord d'arme légère et des crochets aux quatre coins du compartiment de combat. Le support incurvé "Vorsatz P" permettait le tir depuis l'intérieur du véhicule par le pourvoyeur d'une mitrailleuse MP44.

Légèrement modifié par rapport au Panther, le PaK42 était une pièce L/70 de 75mm qui pouvait percer 138mm de blindage incliné à 60 degrés à 100 mètres, et 129mm, 111mm et 88mm à 500, 1.000 et 2.000 mètres respectivement, une menace certaine pour tout blindé allié du moment. La chaise de route était une structure en tube improvisée.

Si la suspension du châssis du Panzer IV était conservée, le bandage caoutchouc des quatre roues de route avant (trois sur certains véhicules) de chaque côté était supprimé pour supporter le poids accru de l'avant du IV/70(A) ; il semblerait que les Schürzen latérales étaient à l'origine des plaques pleines, mais elles ont ensuite été remplacées par des grilles, permettant d'économiser du métal et également efficaces contre les charges creuses. D'autres changements furent irrégulièrement apportés durant la production, dont la réduction de quatre à trois galets de retour et l'intégration

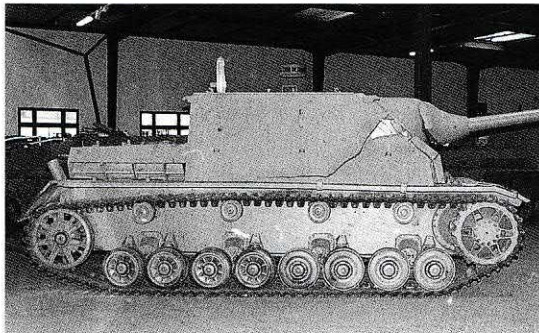
du crochet de remorquage dans le blindage latéral.

### ■ Déploiement et au Combat

Le IV/70(A) fut à l'origine déployé comme un tank standard, et donc fourni comme le Panzer IV à des Panzer Divisions et Brigades, à commencer par la Führerbegleitbrigade (brigade d'escorte d'Hitler) le 8 octobre 1944 puis plus tard la même année à diverses Panzer Divisions dont la 17<sup>ème</sup>, la Grossdeutschland Panzergrenadier Division, le 2<sup>ème</sup> Panzer Regiment et le 208<sup>ème</sup> Panzer Bataillon, et par la suite en janvier 1945 aux 7<sup>ème</sup> et 24<sup>ème</sup> Panzer Divisions. Par la suite, des brigades de Sturmgeschütz en furent dotées en petit nombre.

Bien qu'il ait été déployé sur les fronts Ouest et Est, on en sait peu sur le IV/70(A) au combat. Une exception cependant, les exploits du Leutnant Hartmann de la 311<sup>ème</sup> Sturmgeschütz Brigade, dont le IV/70(A) mit hors de combat à distance treize tanks soviétiques dont des JSU-152 lors de la défense de Breslau en avril 1945, qui lui valurent la Ritterkreuz. Un IV/70(A) de la 106<sup>ème</sup> Panzer Brigade fut capturé en 1944 et est exposé aujourd'hui au Musée des Blindés de Saumur.

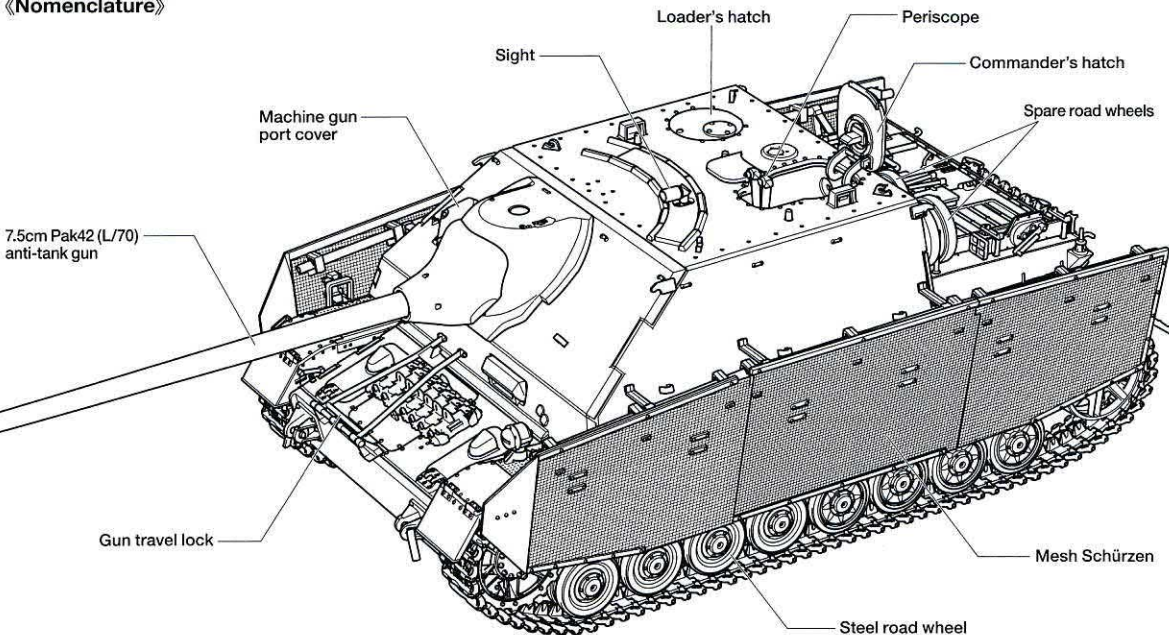
Souvent considéré comme solution provisoire et apparu seulement en fin de conflit, le Panzer IV/70(A) fut néanmoins un soutien bienvenu aux troupes allemandes et une menace constante pour les forces alliées.



#### Caractéristiques du Panzer IV/70(A)

- Longueur: 8,44m
- Largeur: 2,88m (sans Schürzen)
- Hauteur: 2,35m
- Poids en ordre de combat: 27 tonnes
- Equipage: 4
- Moteur: Maybach HL120TRM V12 essence 4 temps refroidi par liquide
- Puissance maxi: 272ch (à 2.800trs/min)
- Vitesse maxi: 37km/h
- Autonomie: 200km (sur route)
- Armement: canon anti-char 7.5cm Pak42 L/70 x1; mitrailleuse MG42 7,92mm x1

### «Nomenclature»



**A** 《第106戦車旅団所属車輛 1944年末 西部戦線》  
106th Panzer Brigade, Western Front, Late 1944



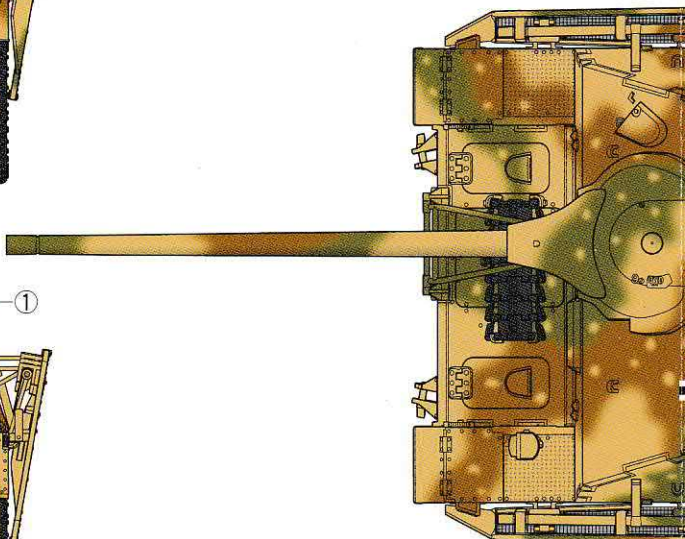
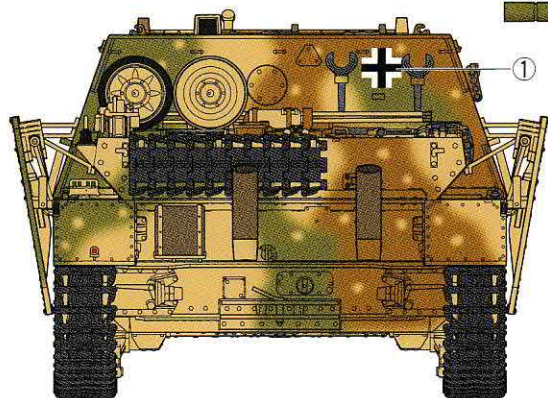
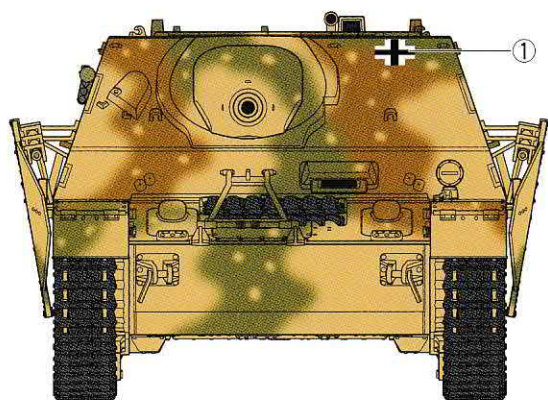
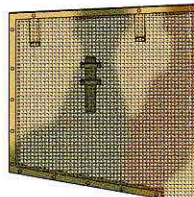
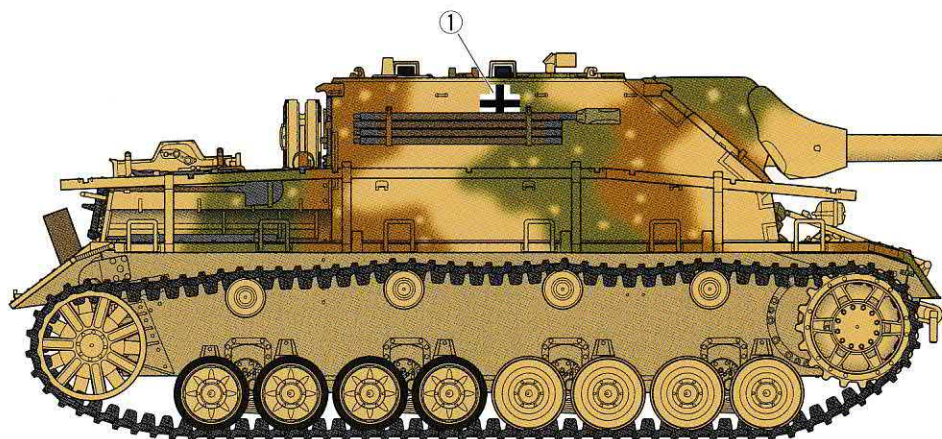
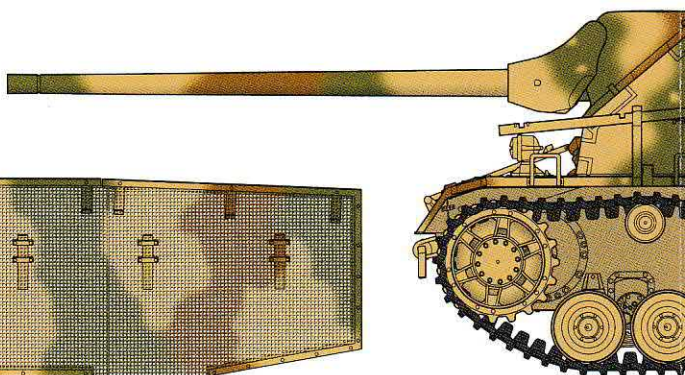
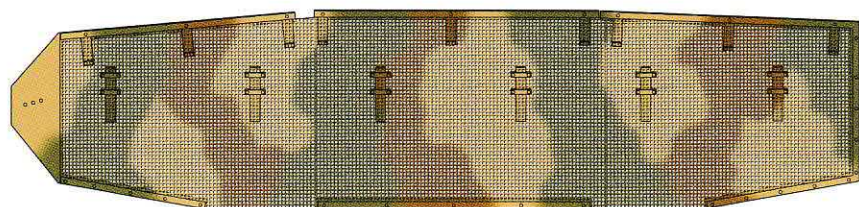
LP-55 (XF-88)  
ダークイエロー2  
(ドイツ陸軍)  
Dark yellow 2



LP-56 (XF-89)  
ダークグリーン2  
(ドイツ陸軍)  
Dark green 2



LP-57 (XF-90)  
レッドブラウン2  
(ドイツ陸軍)  
Red brown 2



**B** 《第17戦車師団所属車輛 1945年 東部戦線》  
17th Panzer Division, Eastern Front, 1945



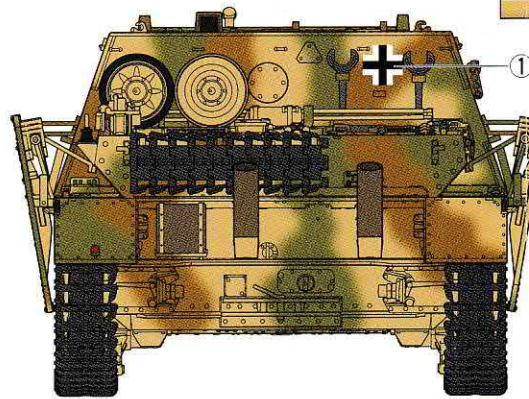
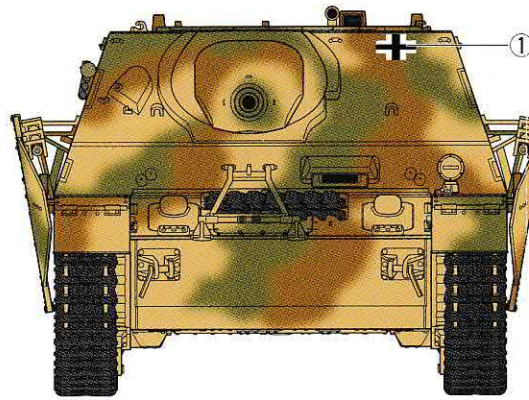
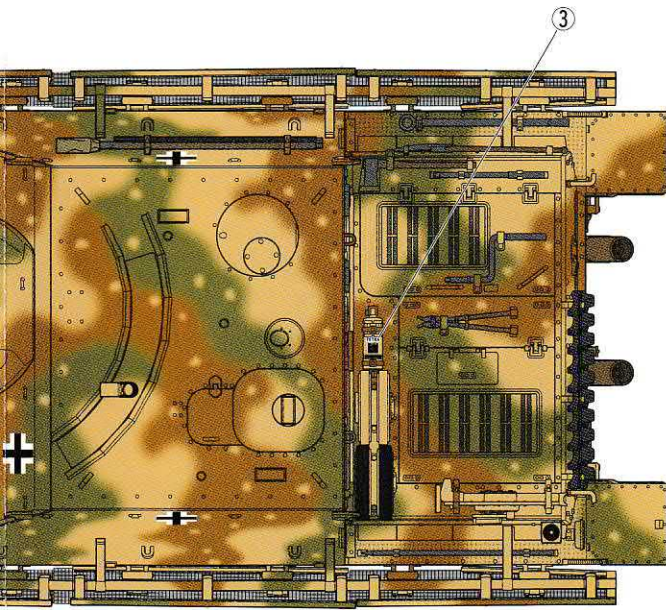
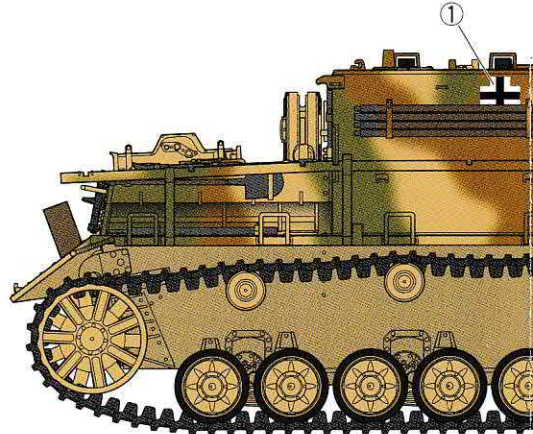
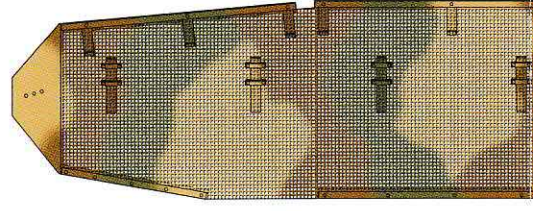
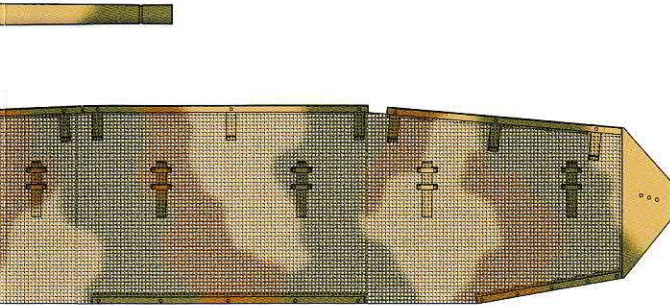
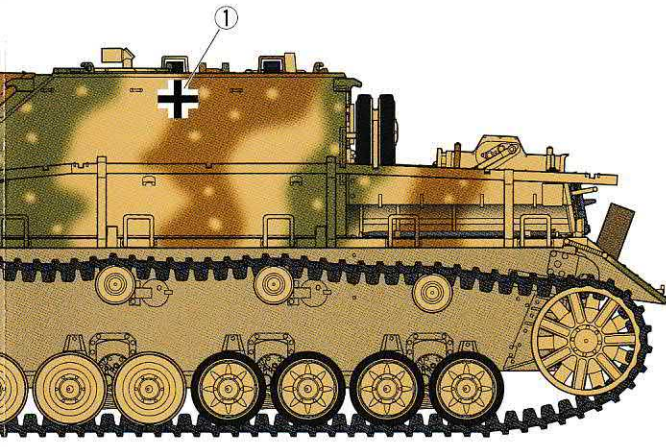
LP-55 (XF-88)  
ダークイエロー 2  
(ドイツ陸軍)  
Dark yellow 2

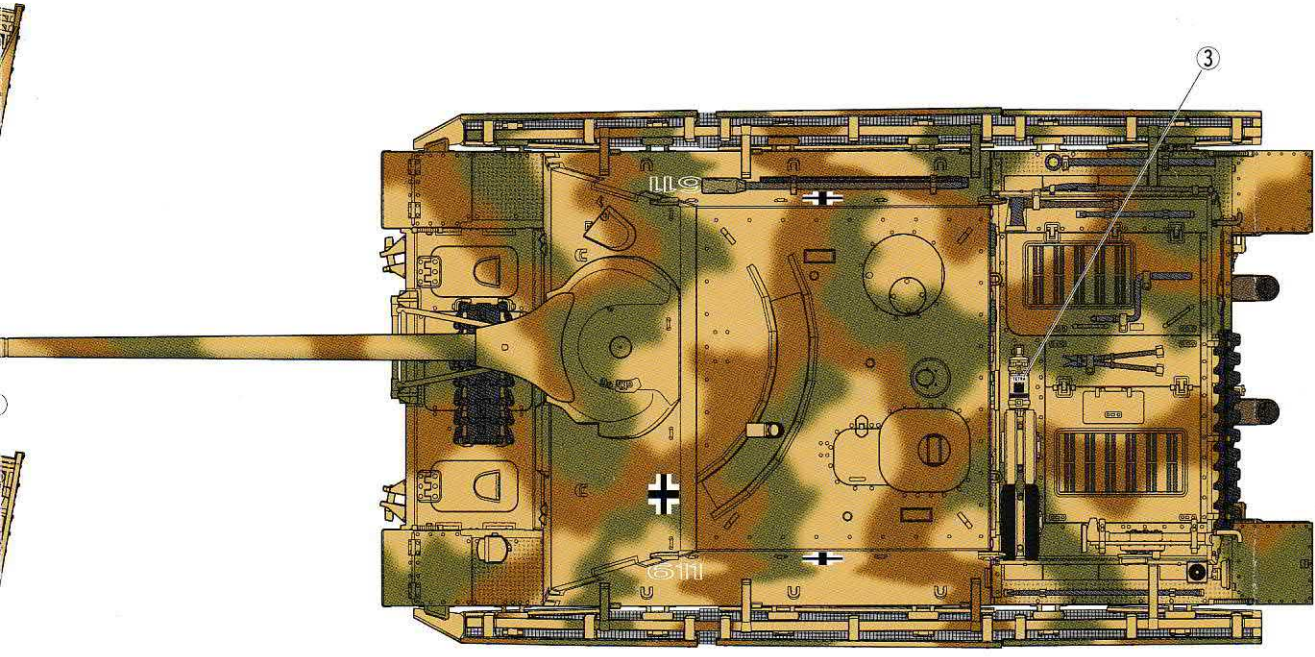
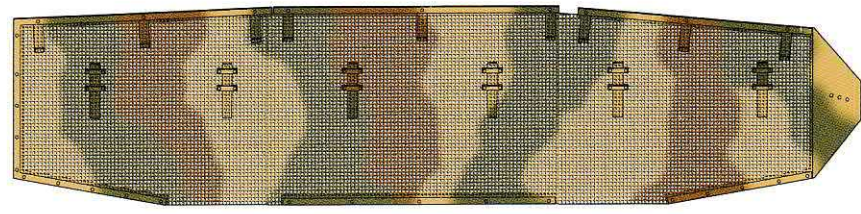
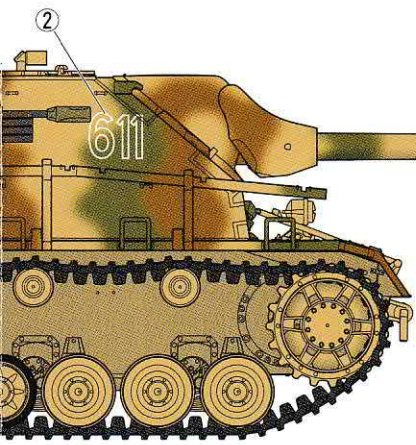
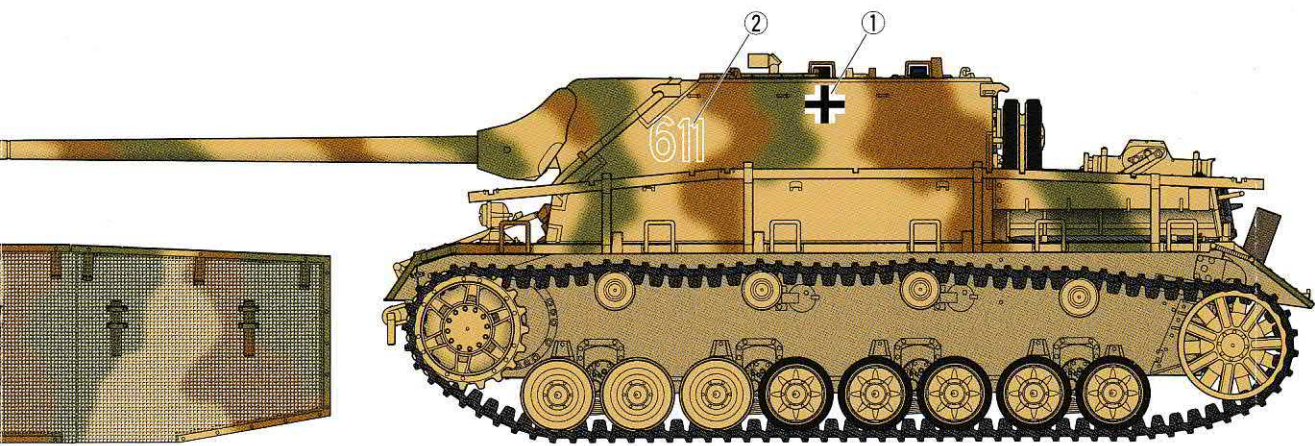


LP-56 (XF-89)  
ダークグリーン 2  
(ドイツ陸軍)  
Dark green 2

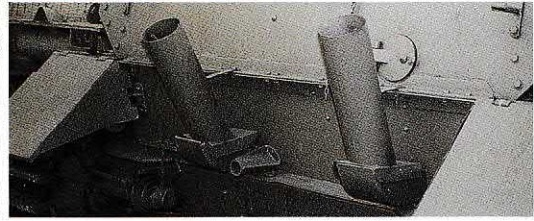
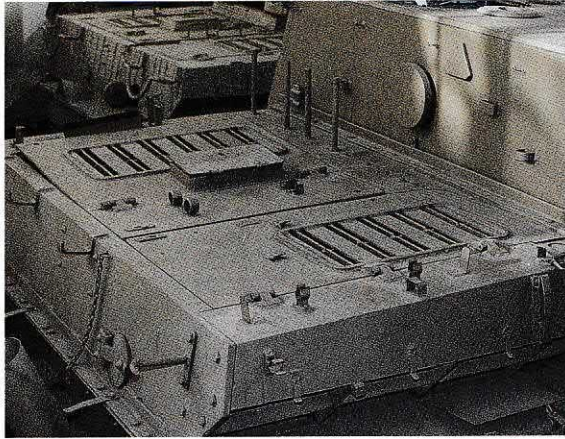
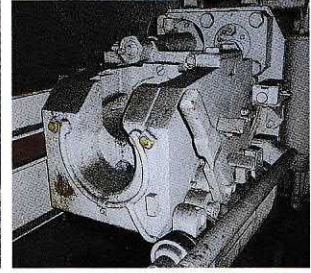
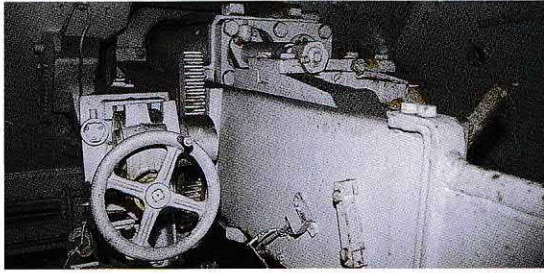
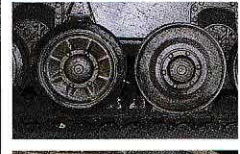


LP-57 (XF-90)  
レッドブラウン 2  
(ドイツ陸軍)  
Red brown 2





# PHOTOS



# PAINTING

## 《IV号駆逐戦車/70(A)の塗装について》

第二次大戦後期の1944年8月から、ドイツ戦車はダークイエローをベースにダークグリーンとレッドブラウンの3色迷彩を生産工場ですることとされました。1944年8月に生産が始まったIV号駆逐戦車/70(A)も同様です。また、1944年秋以降に生産された車輛の多くには、3色迷彩に斑点を加えた、「光と影」迷彩と呼ばれる待ち伏せ攻撃用の独特な塗装が施されました。装備品など細部の塗装は組み立て図中に各種タミヤカラーの色番号で図示しました。パッケージのイラストも参考にして、リアルに仕上げてください。

## Painting the Panzer IV/70(A)

From August 1944, German armored vehicles including the Panzer IV/70(A) were supplied painted in a three-color camouflage of a dark yellow base covered with dark green and red-brown patterns. Most vehicles produced from Autumn 1944 featured small spots atop the camouflage for greater effect in ambush roles. Painting instructions for details are indicated during assembly, and you may refer to the packaging illustration as well.

## Bemalung des Panzer IV/70(A)

Ab August 1944, wurden deutsche Panzerfahrzeuge ab Werk mit einem 3-Farb Tarnanstrich ausgeliefert, bei dem auf einer dunkelgelben Basis dunkelgrüne und braune Flecken aufgetragen wurden. Die meisten Fahrzeuge ab Herbst 1944 hatten kleine Flecken in der Tarnbemalung als Verbesserung der Hinterhaltung. Bemalungshinweise für Details finden sich in der Bauanleitung. Sie können sich auch nach der Abbildung auf der Verpackung richten.

## Peinture du Panzer IV/70(A)

A partir d'août 1944, les véhicules blindés allemands dont le Panzer IV/70(A) étaient livrés peints en camouflage trois tons constitué d'une base jaune sombre couverte de motifs vert foncé et brun rouge. La plupart des véhicules produits à partir de l'automne 1944 portaient de petites taches par-dessus le camouflage pour plus d'efficacité en embuscade. Les instructions de peinture des détails sont fournies durant l'assemblage, et on peut aussi se reporter aux illustrations de la boîte.